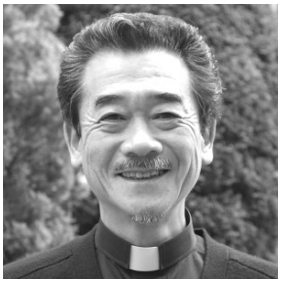
ヨゼフ会便り

発行者　ヨゼフ会　横浜市中区山手町 44 番地 カトリック山手教会内
第 42 号　　2021 年 12 月 24 日発行

¶人と人とをつないで下さる神さまのわざ



主任司祭　鈴木 真

この秋は、何気に結婚ラッシュでした。コロナで挙式の時期を待っていたカップル、あるいは逆に大勢の人を呼びたかったけど、この御時世で小ぢんまりした式を選んだカップルなどなど。様々な結婚式の司式で走り回りました。

１０月の末に、山手と磯子の教会の仲間同士のカップルの結婚式が、山手でありました。これには様々な教会の青年たちが集まりました。中には、実に二年ぶりに会う青年も。ただ、マスクをしていると、いまいち誰だかわからずに「お久しぶりです！」「って、君だれ？」なんていう場面も少なくなかったですが、嬉しい再会がたくさんありました。しかも新郎の御両親は、二人ともわたしの学連（横浜教区カトリック学生連盟。教区の大学生の活動）時代の一つ上の先輩。俺もまともな人生を歩んでいたら、子どもが結婚する年齢なんだなぁ‥などといらんことを考えながら、同世代ということで、同じ学年の仲間たちとも久しぶりの懐かしい再会があり、さながら同窓会状態でした。

教会というのは不思議な集まりだなぁ、とつくづく思います。よく引き合いに出すことですが「教会」と訳された元の言葉は“呼ばれた者の集まり”という意味。そこでつながる人を通して、無限につながりが広がるだけでなく、嬉しい再会も少なくない‥と感じました。

１１月には、同じ教会同士のカップルの結婚式がありましたが、新郎が上智大学の出身で、学内にあるクルトゥール・ハイムという小さな聖堂でした。人数があまり入れないということもあり、こちらは両家の家族だけの、小ぢんまりとした式でしたが、それはそれで両家のきずなが凝縮したような、なかなかいいものでした。

よく〈教会は血によらない家族〉と言われますが、実際にはそこにいい塩梅での血縁も当然ながらあります。そしてその〈血のつながり〉を通しても、さらに多くの人がつなげられていく‥‥それもまた、神さまの大きなわざなのでしょう。

長引くコロナ禍で、なかなか自由に人と会うことができない状態でもありますが、人が生きているという現実の中で、神さまが確かに人と人とを結んで下さっている、そんなことを強く感じた今年の秋でありました。

結婚された皆さん、どうぞ末永くお幸せに。

¶清い心は神を見る

村田 隆裕

この題名は、子供のころにあったカトリックかるたの一句です。この小文は、この句にふさわしい信仰上の行為について教会報「やまて」に見出した記事についてです。

２０１２年、今から９年前の１１月２４日、山手教会は横浜天主堂献堂１５０周年を盛大に祝いました。その記念として「横浜天主堂・カトリック山手教会１５０年史」が刊行されました。筆者は編纂委員という大役を仰せつかりましたが、教会月報「やまて」を通読できたことは大きな役得でした。今回はその際に心に残った二つの記事についてご紹介したいと思います。一つは１９６６年１１月号(４号)に掲載された「我が家に訪れた神の示現」(中山信男著）です。

ここに書かれているのは、著者の次女節子さんの闘病と帰天についてです。節子さんは高校２年の若さで骨肉腫に侵され、さらに肺に転移し、余命３，４か月と宣言されました。病に苦しむ中での懸命な祈りが聞き届けられ、２か月後に病が完治するという奇跡の体験の後、受洗の恵みに与られました。

ところがやがて病が再発し、以前にも勝る苦しみに苛まれる中、お母さまの「苦しみを代わってあげたい」との思いに対し、「お母さんにこんな思いはさせられないわ。私だけでいいのよ。ふつうの人ならならない病気を、神様が試練として私にお与えになったのよ。私が耐えられるからこそ、神様がお与え下さったのだから、耐えなければ・・・」と言っておられたそうです。彼女は程なく安らかな死を迎えられました。

私はこの清らかな逸話に接し、思い出したことがありました。それは、私の中学の時のカトリック信者の同級生のことです。彼は熱心な信仰を持ち、小神学校(中学からの神学校)に在籍した程でした。後に同窓会で再開したときに、癌に侵され、背中が板のように固くなっていました。驚いた私が「痛いんじゃないの？」と聞くと、彼曰く「俺はとくに治療はしていない。主の苦しみを思えばなんでもないから。」彼は常日頃からそう言っていたようで、後に彼の帰天の知らせをよこしてくれた同窓生もその話にいたく感銘を受けた、と書いてきました。

さて、記念誌に遺されている他の逸話に戻ります。「やまて」２３号に佐藤志行さんが寄稿された珠玉の一文です。佐藤さんは第二次大戦中の軍隊での体験について記しておられます。天皇制至上主義の軍隊では、クリスチャンが憎悪の対象となることもあり、ことあるごとに迫害を受けていたそうです。佐藤さんの場合も例外ではありませんでした。

「ある冬の夜のこと、屋外の洗濯場に連れて行かれ、裸にされてコンクリートの上に正座させられました。大きな水槽には氷が張っていました。その氷を割って、ヒシャクで頭からチョロチョロ水をかけられました。バケツで一度にかけられるのは耐えられますが、寒風の中で氷水を少しずつかけられるのは拷問です。顔も口も凍り付いてしまって口も動かせませんし声も出せません。手も足も感覚がなくなり、気が遠くなり、崩れるように倒れました。体が硬直したようになりました。私に出来たことは「天にます」と「めでたし」(筆者註：現在の「主の祈り」と「アヴェマリアの祈り」) を心の中で唱えることだけでした。不思議に気を失っていくとき、甘美な平

和と光を感じました。・・・」

佐藤さんは今年の１０月に帰天されました。

これらの逸話はクリスチャンとしての生き方の根幹的なあり方を物語っているようです。このような例は普通のことではないでしょう。しかし、普段の生活の中でも、耳をすませば神様の語りかけて下さる声は聞こえてくるかもしれません。私も人生の最終コーナーを回って久しく、いつゴールに到達してもおかしくない段階に来ておりますので、常に清い心を保ってその声に気付きたいものです。

¶キリスト教的俳句

中島 清洋

私が友人に誘われて「俳句と連句」の結社に携わりもう１０年となります。俳句は御承知のように、とてもポピュラーな文学ジャンルで、いわゆる俳句人口は５００万人とも、１０００万人とも言われています。一方、連句の方は多くても数千人と言われており、日本連句協会の会員数は７００人弱で、俳句に比べると、とてもマイナーな存在と言えます。連句とは「俳諧の発句(第一句目の長句)が独立して俳句と呼ばれるようになった以降、特に連歌や俳句と区別してこの呼称を用いる。原則として複数で五七五の長句と七七の短句とを交互に付け連ねるもの」と辞書にあります。実際に我々がやっている連句は、歌仙という形式で三十六句から成り立っています。ちなみに、連句の最後の句は「挙句」と言い、「挙句の果て」という表現の由来はここにあります。

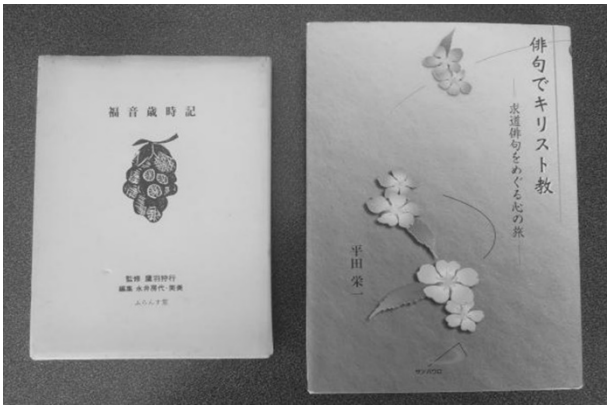
そんな俳句と連句を通して、本題の「キリスト教的俳句」について、日頃私が感じていることを述べさせて頂きます。俳句と言えば、季語というものが誰でも頭に浮かぶでしょう(連句でも季語を使いますが、俳句には無い季語無しの雑の句というものがあります)。私の結社で使っている歳時記(季語を集めて分類し、それぞれに解説と例句をほどこした書物)を例にしますと、キリスト教関連の季語としては、「初弥撒」「踏絵」「謝肉祭」「聖母祭」「聖金曜日」「聖週間」「クリスマス」などがあります。勿論、これらの季語を使っただけでは、その俳句が真にキリスト教的であると言うことにはなりません。例えば「クリスマス」を使ったものでは、冬の娑婆の催しとして唯詠んでいるだけで、全くキリスト教の求道とは関係の無い句が多いのが事実です。

以下に私なりにキリスト教的俳句を幾つかのレベルに分類してみました。①前述の「クリスマス」の季語を使っただけという程度のもの【例句】『へろへろとワンタンするクリスマス（秋元不死男)』。②季語がキリスト教関連か否かに拘わらず、読み手がキリスト教を少し勉強した人で無いと理解できないレベル【例句】『寒日差磔像の主は膝曲げて（西谷しづ子)』。③日頃聖書や教会行事などに親しんでいないと理解出来ないレベル【例句】『棕櫚の枝抱きて帰る東風の朝（建石正子)』。④例えば「神」を詠み、それがキリスト教の神と表現されていなくとも、読み手がキリスト教の神と捉えることが出来るレベル【例句】『春睡の神にあづけし命かな(徳永夏川女)』。この句については、マルコ４－３５～４１（マタイ８－２３～３４、ルカ８－２２～３９)が連想され、かなり求道的なレベルです。

以上が私なりのキリスト教的俳句の分類ですが、実際に私が所属する結社において出句されるキリスト教的俳句は、殆んど①レベル。稀に②レベルがあるかなという感じです。勿論メンバーには、カトリックやプロテスタントの信者も幾らかはいるのですが、③や④レベルの出句は殆どありません。たとえ作句能力があったとしても、読み手側のキリスト教への理解度が低いと、正当な評価が得られない為と思われます。今回この稿を起こすにあたり、キリスト教的俳句を更に広く探してみました。しかし、なかなか資料として参考になるものが少ない状況です。

最も参考になったのは、１９９３年出版の「福音歳時記」（フランス堂刊）というものでした。絶版でしたので、古書を買い求め読ませて貰いました。監

修者に拠れば、それまでのキリスト教の季題や例句を集めた歳時記として「キリスト教歳時記」があり、それに含まれる例句等は１９７６年までのものであった。編者がこれを参考にしながら、十余年の歳月をかけ季題や例句を増やし纏め直したのが本書だということです。



また、現在新品で入手できる参考書物としては、「俳句でキリスト教」（２００５年、サンパウロ刊）があります。これも読ませて貰いましたが、引用されているキリスト教的俳句の多くが前述の「福音歳時記」からのものでありました。よって、「福音歳時記」の新版またはそれを超えるキリスト教的俳句の参考図書の出現が大いに期待されます。残された我が人生、これから多くのキリスト教的俳句に巡り会えんことを願って止みません。

¶ 洗礼名の旅

古谷 信彦

主のご降誕を心よりお祝いするとともに、皆さま一人ひとりに神様の豊かなお恵みがありますことをお祈りいたします。

さてさて原稿のご依頼をいただき何を書こうかと考えあぐねていました。新型コロナウイルスと向かい合ってのご時世、医学的なこととも思いましたが・・。

私の洗礼名はマキシミリアノ・マリア・コルベです。その神父様が日本でお過ごしになられた聖母の騎士にずっと行きたく思っていました。その願いがついに実現した「２６時間長崎の旅行記」を書きたいなと思います。大学院時代と新婚時代２年ほど長崎で過ごしましたが、一度も聖母の騎士には行ったことがありませんでした。その後も聖母の騎士誌を見るたびに行きたいなと思いながらも忙しさを言い訳にあきらめていました。そんな中、夕食後に突然妻に“２日間仕事がないでしょう？長崎行きのチケットとホテル予約したから！”と言われました。有無を言わさず翌日のお昼には大村空港に着いていました。久しぶりの長崎はなんとなく懐かしく、タイムトラベラーのようなドキドキ感がありました。

聖母の騎士

路面電車一日乗車券を買い、龍踊で有名な諏訪神社を過ぎ，蛍茶屋駅で降りました。裏道があるの！と妻の３０年前の記憶をたどりつつ歩きましたが、行き止まりの連続・・まっとうな道を進んだほうが何倍も早い気がしました。念願のコルベ記念館は想像していたものよりこじんまりとしていました。扉を開けるとそこには髭を伸ばされ眼鏡をかけ、自分のアウシュビッツでの姿を見ておられるような少し悲しい顔の神父様が入り口に立たれていました。

コルベ神父様はポーランドを出港し１９３０年４月に長崎に到着されましたが、その時にはすでに結

核の症状が出ておられました。そのような苦しい中でも、その年の５月にはもう“聖母の騎士”第１号を発行されたのです。そのあと現在の場所に神学校を兼ね備えた修道院とルルドを開き、フランシスカン的な清貧生活を送りながら聖母の騎士誌の発行と学園教育に専念されました。すべてマリア様に祈り求める毎日だったそうです。古い白黒の写真にはコルベ神父様と子どもたちそしてゼノ修道士のお顔もありました。その時に使われていた活版印刷の機械、そしてコルベ神父様が使われていた古い木の机などが展示されていました。その机に顔を伏せるとコルベ神父様が“よく来たね。私と同じ道を歩めるように見守ってあげるからね。”と話しかけられたような気がしました。６年後には日本を離れて国に戻られますが、第二次世界大戦が勃発し、１９４１年には皆さんがご存知のようにアウシュビッツで死刑を宣告された方の身代わりとなって命を捧げられました。

ルルド

聖人といわれる人がこんなにも身近なこの場所で過ごされ、その人が触れていたものに触れ、その人と同じ景色を見て、同じ場所で祈ったこと・・本当に不思議な感謝にあふれる時間でした。コルベ神父様が毎日マリア様に祈られたルルドで祈りを捧げ山を下りてきました。ヨハネパウロ２世もここに行きたいと希望されて聖堂やルルドでの祈りを捧げられたそうです。そのパパ様に勧められマザーテレサも訪れた場所です。皆さまも長崎に行かれた際には足をお運びください。後ろ髪を引かれつつ聖母の騎士を後にして、市内に戻った時には日も暮れかかっていました。眼鏡橋を通り、吉宗で蒸寿司と茶碗蒸しの夕飯をいただきました。数十年ぶりでしたがやはり老舗の味を実感いたしました。あくる日は浦上天主堂や昔通ったキャンパス、原爆の爆風でずれた大きな門柱や片足鳥居など学生時代を思い出しながら足跡をたどり、バタバタと空港に戻り帰ってまいりました。短い長崎旅行でしたがとても満喫した時間となりました。

最後にコロナウイルス感染についての一言。韓国などでは感染者が急増している状況ですが、日本では感染者の数が驚くほど減少しています。専門の先生方もワクチン効果だろうとは話されていますがはっきりとした理由は話されていません。私は慎重な日本人の国民性が今の数ではないかなと考えておりますが・・(ワクチン接種率は韓国も日本とほぼ同じだったそうです。)私は以前神父様が話されたように、信徒みなが心を込めて“新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈り”を唱えていたからかもしれないなと思ったりもしています。神様のお考えになることは私たちのはかり知れないものがあるのでしょう。

¶ 神様のお使い（後編）

川田 耕嗣

先生から指示を受けた後暫くして姉夫婦がアンジェロの好物を持って飛んできてくれました。僕達はアンジェロのすぐ横に腰掛け話をしていたのですが、気がつくとさっきまで殆ど意識も無かったのに、その目を開けこちらに顔を向けたのです。更にその後姉が持ってきたアイスクリームを美味しそうに食べ、水も少しだけ飲んでくれました。

翌日も不思議な事がありました。昼食後何かせずにはいられなくなった僕は「聖書と典礼」の福音の箇所を声を出して読み始めました。何日分くらい読

んだでしょうか、横になっていたアンジェロが突然何事も無かったかの様に立ち上がり、庭に出たいというアピールをしたのです。一体何が起こったの？と思いながらサッシを開けると軽やかな足取りで庭に降りていつもの様にオシッコをして部屋に戻ってきたのです。その後も外は相変わらずの猛暑でしたが少しずつご飯を食べ水も飲めるようになりました。その結果、虚だった目はしっかりと目標を捉えられる様になり、黄色くドロドロだったおしっこがサラリとしたいつものオシッコに戻っていました。

それから数日後、その日もいつもの様に朝ごはんを食べ、水を飲んだ後トイレを済ませ専用の寝台の上で休んでいました。僕も食事を済ませそのままテレビを見ていた時、目の端にアンジェロが立ち上がるのがわかりました。「どうした？」と声を掛けながらその脇に座った瞬間、アンジェロの体が僕の足元にくず折れてきました。舌が力なく垂れ、お腹も動きません、一瞬でアンジェロの死を悟った僕はその体を抱き上げ、「今までありがとう」と言い続ける事しかできませんでした。

暫くして、姉と受洗式後も心配して何度かメールを下さっていた田中眞理子さんに電話をしました。すぐに駆けつけてくれた姉夫婦が帰宅し、外が暗くなり掛けていた頃、アンジェロの傍にぼんやりと座っていた僕の電話が鳴り響きました。画面を見ると田中とあります。何とご夫妻が、僕の家が田中さんのお嬢さんの家の近くだという情報だけを頼りに遠くから車を飛ばしてきて下さったのです。その声を聞いた時、また暗闇の中にお二人の姿を見出した時悲しみの中に小さな光が灯りました。田中さんご夫妻はアンジェロにお別れを言う為にきましたと言って下さいました。特に康裕さんはご自分の過去の体験から、自分の様に愛犬を亡くして悲しんでいる友人の側に行って慰めたいという一心で来て下さったのでした。あの時の僕がお二人によってどれだけ救われたか言葉では表すことができません。

ところで、家族やペットを亡くした時、その直後よりもむしろ日を追うにつれ死が現実味をおび、喪失感に苦しまれる事は無いでしょうか？今回の僕はまさにそうでした。１週間、２週間と時が流れた頃僕は今まで味わった事のない感情に襲われるようになりました。うまく言葉で言い表す事ができないのですが、深い悲しみの感情に襲われて身動きがとれなくなり、逃げ場のない孤独感に押し潰されそうになるのです。

そんな時僕に出来たのは、ロザリオを握りしめたり聖書を抱き抱えながら神様、神様と呼び掛ける事だけでした。無論呼び掛けるや否やその悲しみと恐怖が去っていく様な事はありませんでしたが、暫くすると静かにその悲しみの縛りから解放されるのです。そんな辛い時期先の田中眞理子さんから度々慈愛に満ちたメールを頂きました。僕もそれに対して心の奥にある言葉を絞り出す様に返信する中で気がついた事が有りました。アンジェロが子犬の時から

姉や友人達から、子供を持った事のない僕にとってアンジェロは初めての子供だねと言われていたのですが、今回その死にあたり今まで余り考える事の無かった事、子供を亡くした親の悲しみについて考えました。

それは遥か昔、僕の妹にあたる幼い娘を亡くした両親に繋がります。その悲しみは一体どれだけ大きい物だったのでしょうか？同時になぜかマリア様の事が頭に浮かびました。僕達カトリック信者はマリア様に祈りを捧げますが、僕にとってそれはイエス様のお母様に敬意を表すという意味合いのものでした。けれどその時僕の頭に浮かんだのは光り輝く聖母像ではなく愛する息子を亡くし悲しみに暮れる母親の姿でした。「この方ならわかって下さるに違いない」と信じマリア様に祈りを捧げる信者の方達の気持ちが理解できた瞬間でした。両親とマリア様の事で頭が一杯になった時、止める事のできない感情に突き動かされた僕は両親の写真の前で大泣きしながら自分の無理解を詫びました。この事でアンジェロの死を受け入れる事が出来たのか、次の日から悲しみと恐怖が僕を支配することは無くなりました。

それと同時に今までとは違う形でアンジェロを感じられる様になりました。彼がそっと教えてくれたと感じた事が有ります。実は彼の肉体はあの１７日の夜にすでに終わっていた事。そして僕が自責の念で苦しまない様に命懸けで立ち上がり、ご飯を食べ、水を飲み、普通のオシッコをして見せてくれた事。そして最後に「僕は熱中症で死ぬんじゃないよ。地上での役割が終わったから天国に戻るんだよ。忘れないで、僕は神様のお使いとして君の子供になったんだからね！」と話してくれた事。自己保身のための創作？確かにそうかもしれません。でも僕はその言葉を信じ、心の底から本当にそうであって欲しいと願い素直に受け入れる事ができました。

今でも時々生身のアンジェロを抱きしめたくなる事が有ります。でも大丈夫、目を閉じて上を見れば神様が、そして足元を見ればアンジェロがいてくれますから。

¶ヨゼフ会活動報告（１０月～１２月）

新型コロナ感染防止のため教会での活動が制限されているので、例年行事はすべて中止とし、ミサの案内や奉仕活動のみを行いました。

・１１月６日（土）：帰天者のための追悼ミサ

昨年１０月から今年１０月初めまでに帰天された４３名の方々の追悼ミサを、主任司祭の司式によりロザリオ会と共同で捧げました。

・１２月２４日（金）：ヨゼフ会便り第４２号発行

¶ヨゼフ会活動予定（１２月～３月）

・１２月２４日(金)：降誕祭ミサ奉仕

昨年同様、山手教会聖堂で行われる降誕祭ミサの準備、案内、片付け等の奉仕を行う予定です。

・３月２６日(土)：ヨゼフ会便り第４３号発行予定

新型コロナの感染状況により教会活動が制限されている間は、引き続き活動を自粛します。活動再開が決まりましたら改めてご案内いたします。

¶会員消息

９月１５日から１２月１４日までに次の方が帰天されました。永遠の安息をお祈りいたします。

帰天日	洗礼名	氏　名	享年
2021/10/03	ペトロ	佐藤　志行様	９３歳

¶編集後記

「あなたのために」・・・ある日の梅村司教様の説教で触れられたことがある、昨年１月から２月にかけてＮＨＫ地上波で放送されたＴＶドラマ「心の傷を癒すということ」について改めて思うことがある。

在日韓国人として生まれ、もうすぐ２７年になる阪神・淡路大震災当時自らも被災しながら、被災者の心のケアに奔走した若き精神科医安克昌さんの著作が原案である。安さんは、被災者の声に耳を傾けひたすら傾聴し、その後ＰＴＳＤ(心的外傷後ストレス障害)研究の先駆者になったのだが、３９歳の若さで病魔におかされ亡くなってしまった。

柄本佑主演のこのドラマ、阪神・淡路大震災の具体的な描写、避難所の出来事、解離性同一障害(心的外傷により一人の人間に全く別人格が複数存在するようになる障害)の少女が克明に描かれている。

そこで、私は脚本を担当した桑原亮子さんに注目することになる。４０代前半の彼女は１１歳の頃より徐々に両耳の聴力を失ってしまった重度の聴覚障がい者であることは、ほとんど知られていない。

中学２年生の時、西宮市で被災、早稲田大学進学後、短歌を始め、脚本家への道は、ＮＨＫのラジオドラマからというのも興味深い限りである。

どのような脚本作りだったのか。桑原さんにどうしてもいいものを書いてもらいたいと、心酔するスタッフの取材資料をもとに毎回泣きながら打ち合わせを重ねたという。決して楽ではなかっただろう。

ラスト、心のケアとは「誰も一人ぼっちにさせないこと」に行き着くのだが、私は主人公と妻が出会う映画館の「東京物語」のくだりが大変微笑ましく桑原さんの思いが色濃くでていると思う。

そして、私の中で聴覚障がい者とクリスマスの遠い記憶が甦る。東京オリンピックの頃、５８年前になる。休日にオリンピックを近所の関係だったのかもしれない、複数の生徒たちでテレビのある家で鑑賞していた。当時オリンピックは秋だったからその流れでクリスマスになり子供たちのパーティが計画されＡ君宅に集まることになった。私も呼ばれ、食べ物は各自持ち寄りで、仲間の中にＥ君がいた

夕方近くになり表にＥ君の両親が箱を持って立っていた。まだ障がい者に対しての偏見があった時代、Ｅ君の両親は小さい頃からの聴覚障がい者だった。Ｅ君は一人っ子で健常者だ。その息子の大切な友達に手作りのクリスマスケーキを作って持ってきたのだ。きっと無理したと思う。ただどこのケーキよりも美味しかったと記憶している。Ｅ君は成績もよかった。その後小学生時代の友人の動向は全く分からない。しっかり物で優しいＥ君は結婚して理解のある奥さんと共にご両親を見送っただろうか。

主の降誕を祝うクリスマス。東京、横浜も２年ぶりのイルミネーションで彩られている。不義理もしてきたけれど、いくつも義理を果たしてきたように思う。あまりうまくいかなかったこともあるけれど、思い通りにいったこともいくつもある。家族、友人とともに、「あなたのために」メリークリスマス。来年こそよい一年でありますように。（坪井暢）